㈶　大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第21集

# 加治・神前・畠中遺跡Ⅱ

―貝塚中央線・南海単独立体交差化事業に伴う発掘調査報告書―

1997. 3

財団法人　大阪府文化財調査研究センター

㈶　大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第21集

# 加治（かじ）・神前（こうざき）・畠中（はたけなか）遺跡Ⅱ

―貝塚中央線・南海単独立体交差化事業に伴う発掘調査報告書―

１９９７．３

財団法人　大阪府文化財調査研究センター

# 序　　文

貝塚市は大阪府の南部に位置し、独特の気風をもつことで知られる泉州地域に属しております。この地域は近年、関西国際空港開港の影響もあって開発も盛んになっています。

加治・神前・畠中遺跡は和泉山脈に源を発し、貝塚市域を流れる近木川下流の右岸に立地する弥生時代から近世までの複合遺跡です。ここに成果を報告いたします発掘調査は、都市計画道路貝塚中央線と南海本線の単独立体交差化事業に先立って実施されたものです。加治・神前・畠中遺跡の遺跡範囲はかなり広いものですが、今回の調査区はその中でもかなり大阪湾岸に近い位置にあります。調査対象区域はＡ・Ｂの２区に分割されて実施されました。Ａ区に隣接する地点では、1990年度に発掘調査が行われており、この時の調査では中世の掘立柱建物２棟、土坑、ピットなどが検出されました。今回の調査でもやはり土坑やピットなどが確認されています。またＢ区では付近を流れる近木川の形成した氾濫原を、近世以降に耕地として開発した様子をうかがうことができました。今回の調査では掘立柱建物などは発見できませんでしたが、遺跡の面的な広がりを捉えることができ、この地域の歴史に新たな知見を加えることができました。本調査成果が今後、当地域の歴史を解明する一助となれば幸いです。

なお、本調査を実施するにあたって、大阪府教育委員会、貝塚市、南海電気鉄道株式会社をはじめとする関係者各位には多くのご支援とご協力を賜り、深謝いたしますとともに、今後とも当センターの事業に変わらぬご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成９年３月

財団法人　大阪府文化財調査研究センター
理事長　坪井清足

# 例　　言

一．本書は都市計画道路貝塚中央線・南海単独立体交差化事業に伴う加治・神前・畠中遺跡IIの発掘調査報告書である。

一．調査は南海電気鉄道株式会社の委託により、大阪府教育委員会の指導のもと、1994年度は㈶大阪府埋蔵文化財協会、1996年度は㈶大阪府文化財調査研究センターが実施した。

一．現地における調査は３次にわたる。調査担当者と調査期間は以下の通りである。

１次調査：㈶大阪府埋蔵文化財協会　技師　木下　亘（奈良県から出向）

調査期間：1990年度

２次調査：㈶大阪府埋蔵文化財協会　技師　中川義朗（阪南市から出向）

調査期間：1994年12月５日～1995年２月28日

３次調査：㈶大阪府文化財調査研究センター　技師　西村　歩

調査期間：1996年11月25日～1997年３月31日

一．上記のうち、１次調査は木下（1991）「加治・神前・畠中遺跡」『㈶大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第66輯』として既に報告されている。本書は２・３次調査の報告である。

一．調査にあたっては南海電気鉄道株式会社、貝塚市の協力を得た。

一．遺構写真撮影は各調査担当者、遺物写真撮影は主任技師　立花正治が行った。

一．現地調査には今橋朱美・小原睦子・山本晶子が参加した。

一．本書の執筆、編集は西村が行った。

一．調査で蓄積した資料は、すべて㈶大阪府文化財調査研究センターで保管している。

# 凡　　例

一．調査にあたっては国土座標第Ⅵ系を基準とし、遺構平面図におけるＸ軸・Ｙ軸の座標値はkmを省略して数値のみを表示した。

一．方位は座標北である。

一．標高はT.P.（東京湾標準潮位）＋で、mを省略して数値のみを表示した。

一．土色の色調は小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』に従った。

# 本　文　目　次

第１章　経緯と方法……1
　第１節　調査経緯……1
　第２節　調査の方法……1
第２章　位置と環境……2
　第１節　地理的環境……2
　第２節　既往の調査……2
第３章　調査成果……3
　第１節　層序……3
　第２節　遺構と遺物……9
第４章　まとめ……11
報告書抄録……12

# 挿　図　目　次

第１図　調査地位置図……1
第２図　Ａ区土層断面図……3
第３図　Ｂ区土層断面図……4
第４図　Ａ区遺構平面図……5～6
第５図　Ｂ区遺構平面図……7～8
第６図　Ｂ区出土遺物実測図……10

# 図　版　目　次

図版一　加治・神前・畠中遺跡遠景
図版二　Ａ区全景
図版三　Ｂ区全景（２次調査）
図版四　Ｂ区全景（３次調査）
図版五　Ｂ区段丘崖周辺（３次調査）
図版六　出土遺物

# 第１章　経緯と方法

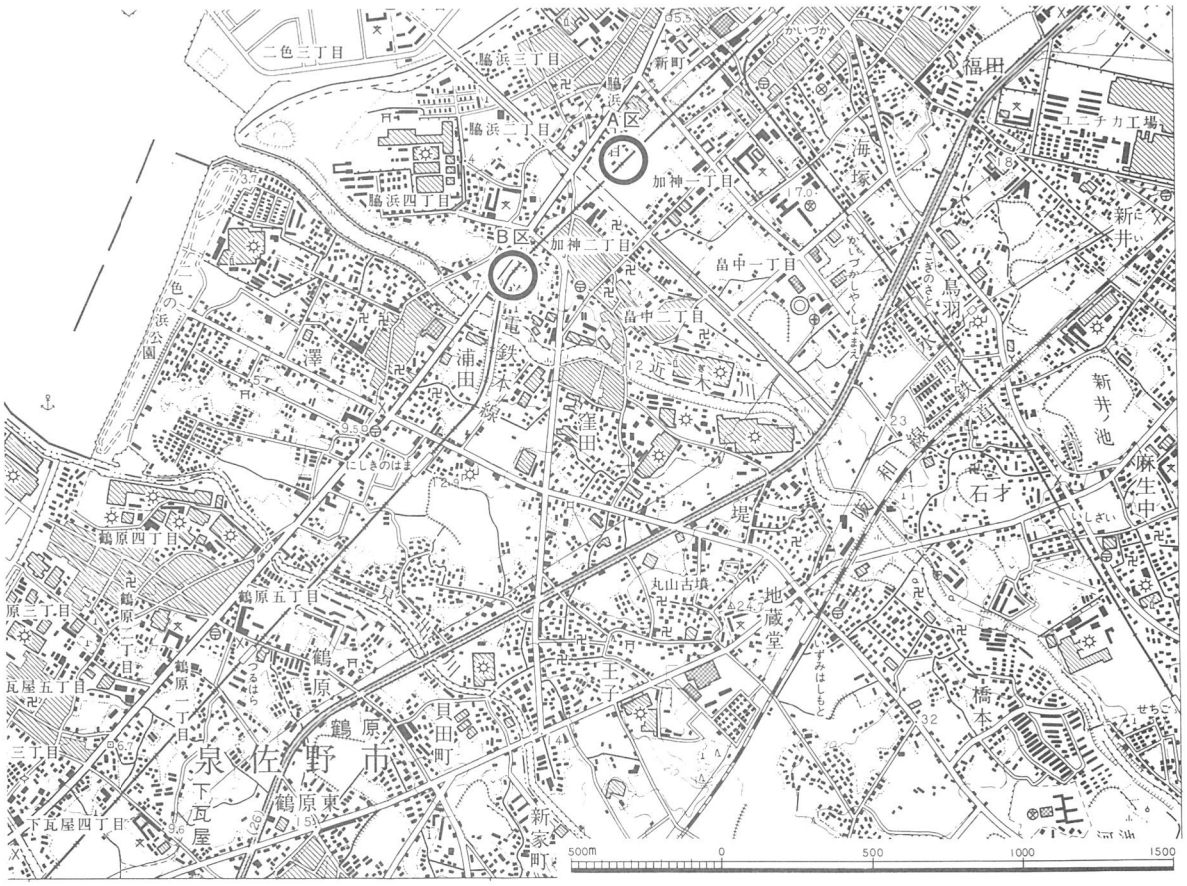
## 第１節　調査経緯

加治・神前・畠中遺跡は大阪府貝塚市加神一帯に広がる遺跡である。今回の発掘調査は、都市計画道路貝塚中央線・南海単独立体交差化事業に伴い実施したものである。南海電鉄本線の高架線建設予定地においては、1990年度の１次調査によって遺構が検出されている。今回の調査区域は1990年度調査地に隣接するため、立体交差化工事の進捗に伴い、大阪府教育委員会は発掘調査の必要性を認め、㈶大阪府埋蔵文化財協会、㈶大阪府文化財調査研究センターが現地調査を担当する運びとなった。

## 第２節　調査の方法

現地調査は、1994年度に２次調査、1996年度に３次調査と分割して実施された。このうち段丘上に位置する３次調査地点をＡ区、Ａ区の南西側の河岸段丘崖直下に位置する２・３次調査地点をＢ区とする（第１図）。Ｂ区において２・３次調査区は長辺で接しており、２次調査区は南東側、３次調査区は北西側にあたる。

現地では国土調査法に基づく新平面直角座標系の第Ⅵ座標系を使用して記録に努めた。調査にあたっては、表土を機械掘削し、これより以下の包含層は遺構面（地山面）まで人力掘削を行った。




第１図　調査地位置図

# 第２章　位置と環境

## 第１節　地理的環境

加治・神前・畠中遺跡は貝塚市の市域北西部に所在する。貝塚市は旧国名でいえば和泉国の南部に属していた。和泉国は西に大阪湾を臨み、北を摂津国、東を河内国、南を紀伊国と国境を接する。地理的にみると和泉国は、和歌山県紀ノ川を貫く中央構造線に沿った内帯側、すなわち北部域が、今なお続く造山活動によって隆起した和泉山脈を脊梁とし、その北西側に弧を描く大阪湾の汀線によって画された地域である。この土地は今に和泉あるいは泉州などと通称され、大阪府下でも独特の気風をもった地方として知られている。

和泉山脈は、和泉層群からなる三国山・葛城山などの主峰を擁した葛城山脈と、その前面に形成された領家花崗岩類・泉南流紋岩類などからなる前衛山地で構成されている。これら基盤山地の前面には大阪層群を主体とした丘陵地帯が展開し、さらにその前縁には、河成砂礫を主とした段丘堆積物で構成された高・中・低位の段丘群が広がりをみせている。段丘堆積層は大阪層群を不整合に覆う高位段丘堆積層、およびその前面の河岸段丘や扇状地性段丘が中位・低位段丘堆積層として分布する。これらの丘陵や段丘群は、基盤山地に源を発する大小の河川によって下刻され、樹枝状の幅広い谷筋を多数開析させている。和泉地域の河川は基盤山地の地塊運動の影響を受け、おしなべて流路が南東－北西方向に緩やかな弧を描くのが特徴で、谷筋も河川と同様の方向に下刻されたものが一般的である。和泉地方の地方自治体の行政区域は、一部を除いて概ね南東から北西方向の細長い形状をもつが、その理由はこうした地形上の特質に由来するところが大きい。またこれら複雑な谷地形を利用した谷池が随所に造築されており、皿池と共に農業用水の確保に悩まされた和泉地域の水利を特徴づける景観を呈する。さて段丘からさらに低地に到ると、河川沿いに氾濫原堆積層、沿岸部に海性の海岸平野が、沖積層として帯状に広範な分布をみせている。

加治・神前・畠中遺跡は、和泉山脈に源を発する近木川、および津田川に挟まれた洪積段丘を中心に広がる弥生時代から近世にかけての複合遺跡である。その遺跡範囲は東西約1.5㎞、南北約１㎞におよび、その中でも今回の調査の対象地は近木川下流右岸の河岸段丘周辺に立地する。現在は埋め立てによって海岸線が沖に移動しているが、かつての海岸線までは700m前後の距離にあって、比較的海寄りに位置している。調査地付近の現況は北西方向へなだらかに傾斜した斜面地で、海浜部に向かって段々畑として利用されているが、近年では開発も進行して大きく景観を変えつつある。

## 第２節　既往の調査

貝塚市内の歴史的環境は、既刊の報告書や市史等で詳述されているため、ここでは繰り返さない。

今回の調査区域の南側に接して、1990年度に南海単独立体交差化事業の南海本線下り線高架建設予定地の発掘調査が実施されている。この調査では掘立柱建物２棟、土坑、溝、ピット等が検出された。掘立柱建物は梁間３間、桁行４間のほぼ同規模の建物で、方向が一致することなどから同時併存の可能性が高いとみられている。遺構の密度は北東方向に高く、南西方向に低くなる傾向が指摘されているが、

全体的に分布は希薄である。

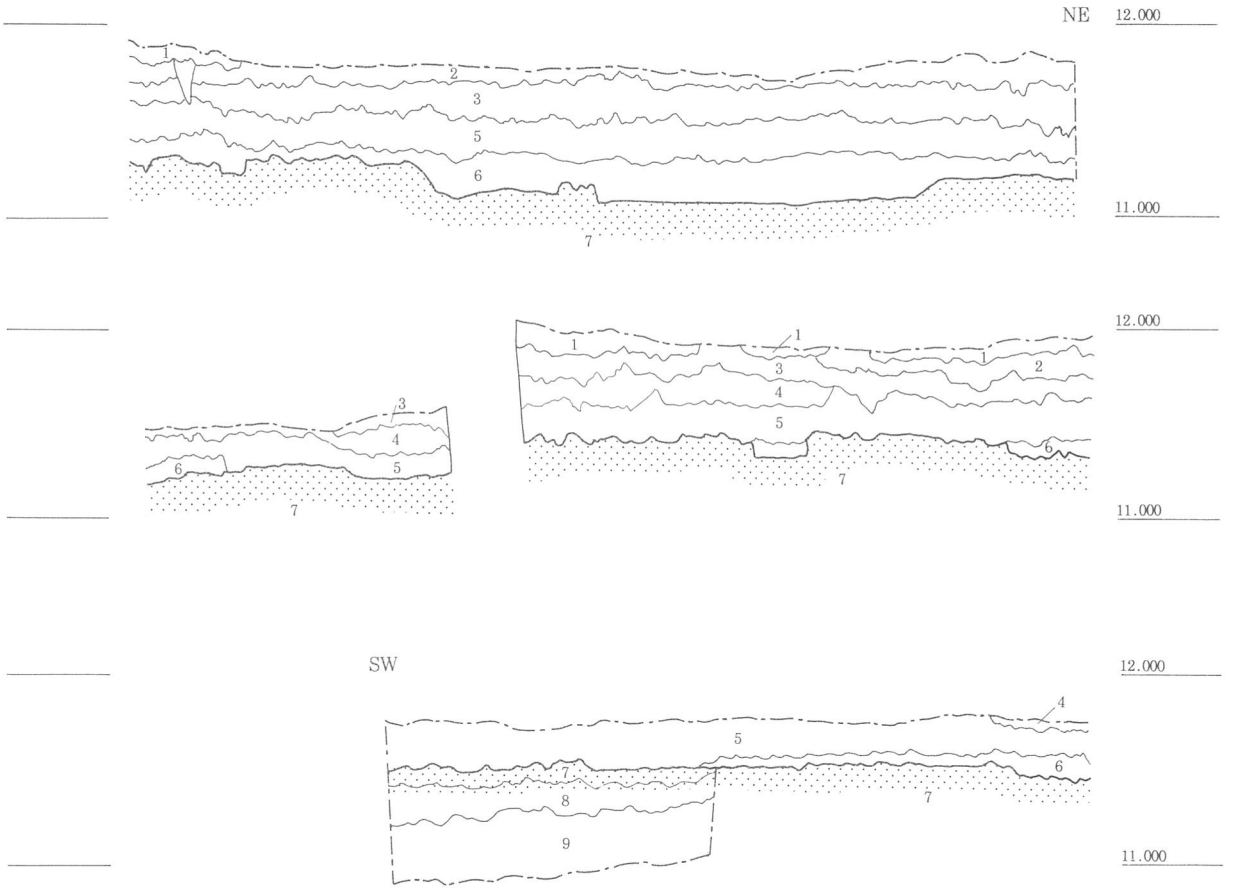
遺物量は遺構内・包含層内ともに極めて僅少である。しかし土坑からは12世紀後半の瓦器椀が出土していることから、掘立柱建物の時期も不明確ながらも12世紀後半の蓋然性が高いとされる。中世期における遺構は希薄であり、遺跡の中心からは離れているとみられる。

# 第３章　調査成果

## 第１節　層序

### １．Ａ区(第２図)

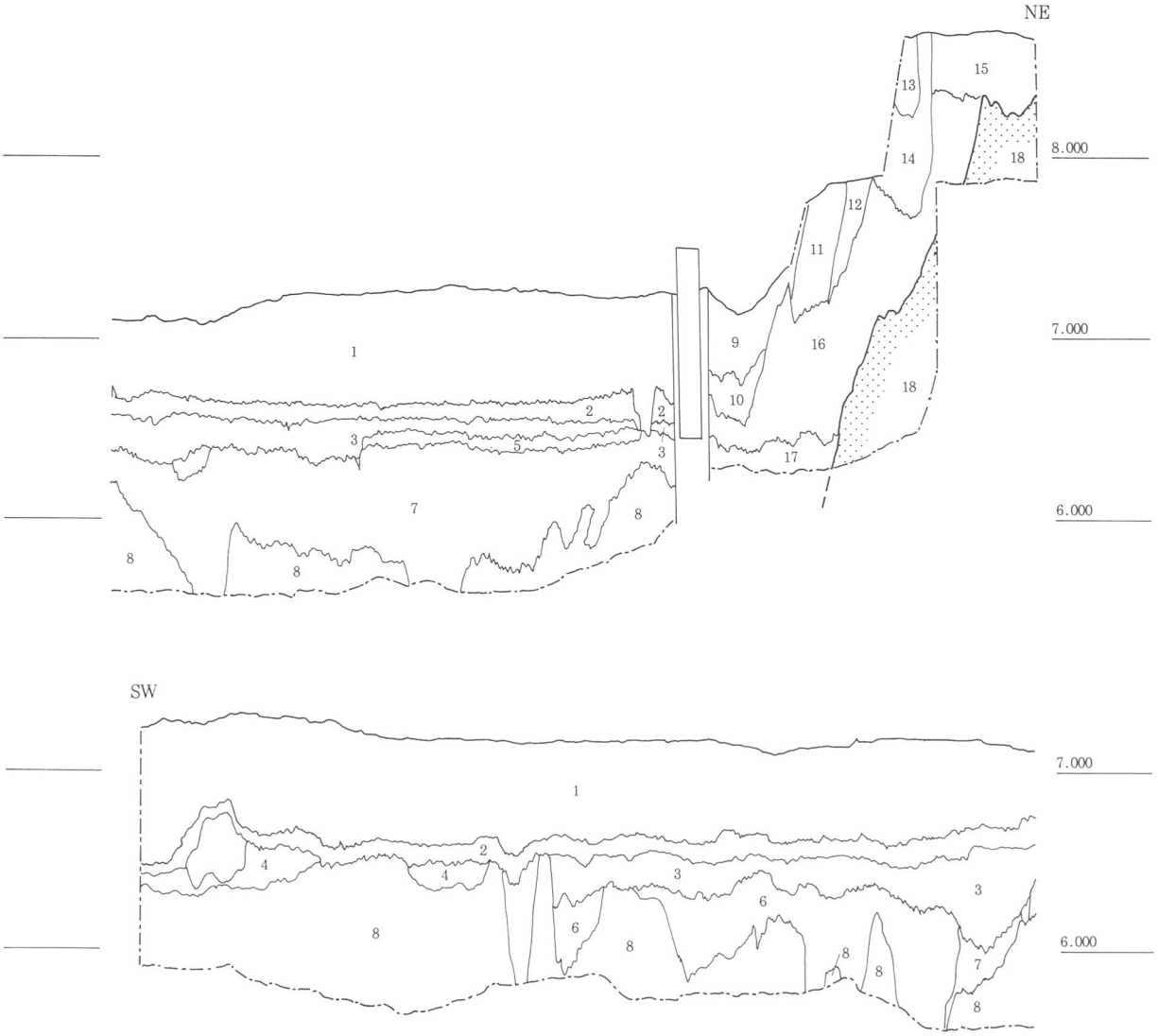
調査対象区域は、南海本線の上下線のうち既に高架化工事を完了した下り線の線路敷跡地の延長130




1　にぶい黄橙(10YR6/3)微砂(近現代)
2　にぶい黄褐(10YR5/3)微砂(近現代)
3　にぶい黄橙(10YR6/4)微砂
4　黄灰(2.5Y6/1)微砂
5　黄褐(2.5Y5/3)微砂
6　暗褐(10YR3/3)微砂
7　明黄褐(10YR7/6)粘土微砂
8　明黄褐(2.5Y6/6)微砂
9　明褐(7.5YR5/6)微砂

0　30m

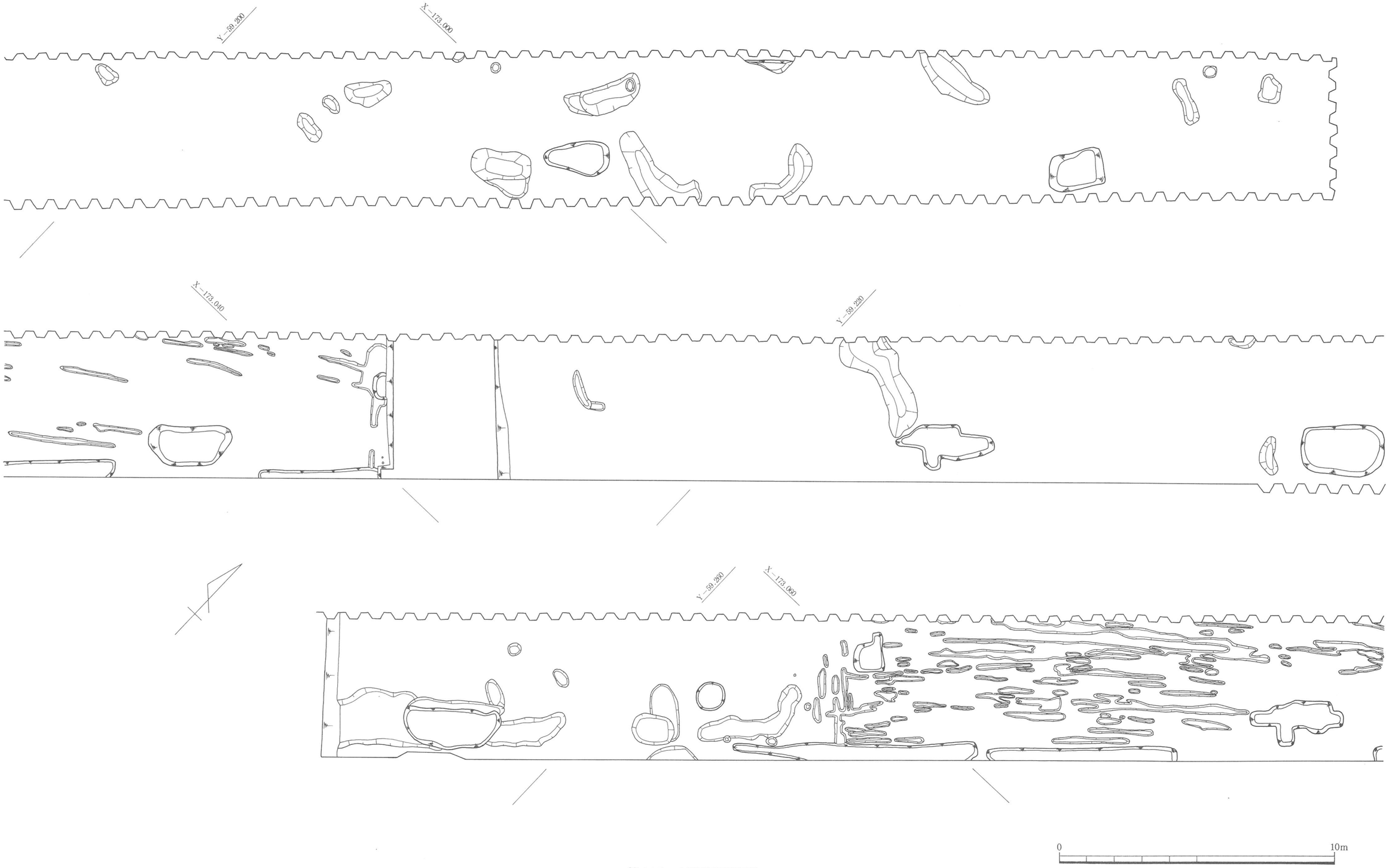
第２図　Ａ区土層断面図



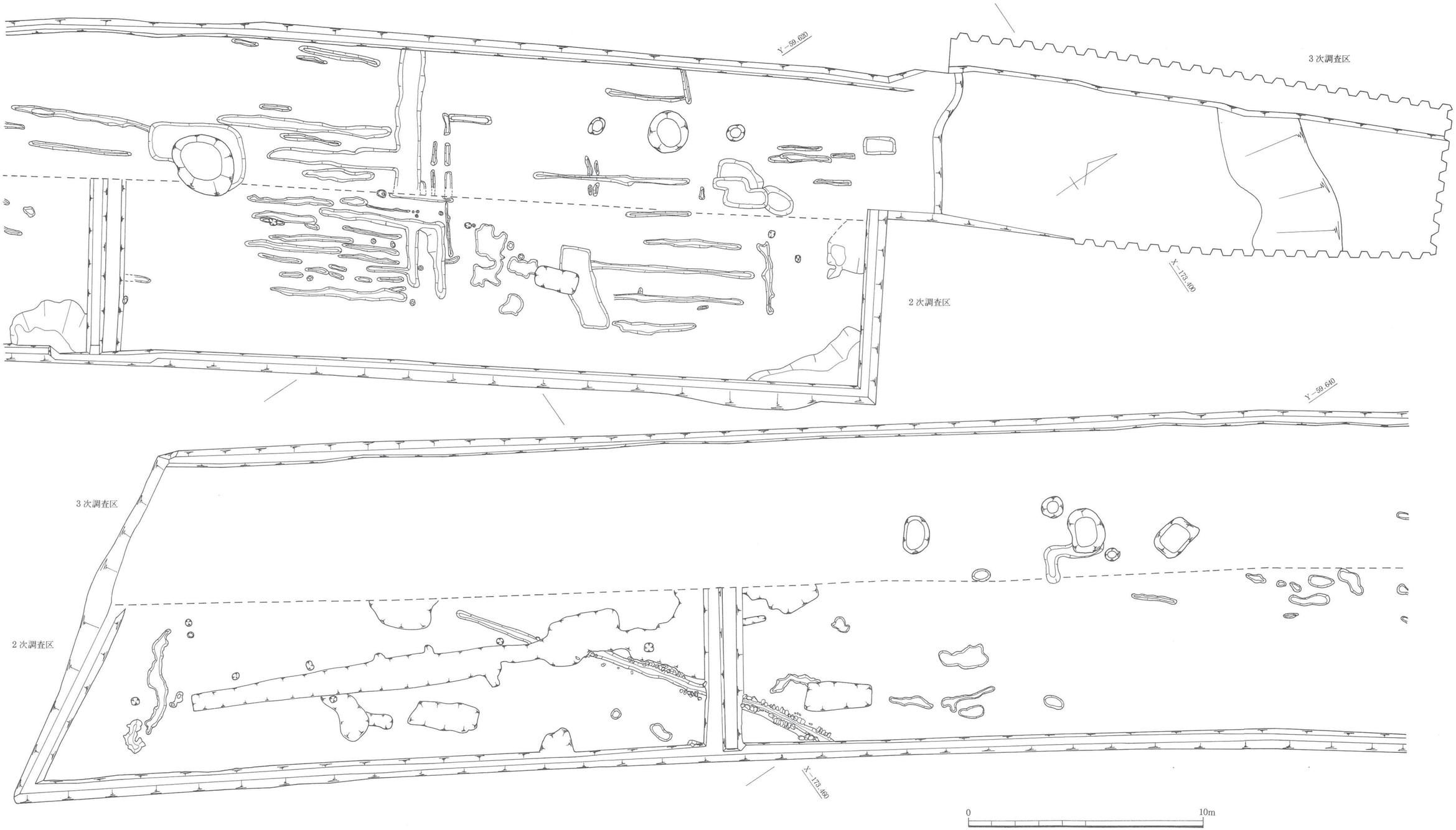

1　盛　土
2　灰褐(7.5YR4/2)微砂(近現代耕土層)
3　オリーブ褐(2.5Y4/4)微砂(近世耕土層)
4　褐(10YR4/4)微砂
5　黄褐(10YR5/8)微砂(近世床土層)
6　オリーブ褐(2.5Y4/3)微砂
7　にぶい黄褐(10YR5/4)細砂
8　灰白(2.5Y7/1)細砂～巨礫
9　にぶい黄褐(10YR4/3)礫混微砂
10　褐(10YR4/6)微砂
11　褐(10YR4/4)礫混微砂
12　暗褐(10YR3/3)礫混微砂
13　にぶい黄橙(10YR7/3)微砂
14　にぶい黄褐(10YR4/3)微砂
15　にぶい橙（7.5YR6/4)礫混微砂
16　にぶい黄褐(10YR5/3)礫混微砂
17　黄褐(10YR5/6)微砂
18　黄褐(10YR5/6)細砂・礫の互層(段丘礫層)

0　30m

第3図　B区土層断面図




第４図　Ａ区遺構平面図


Y−59,620
3次調査区
X−173,400
2次調査区
Y−59,640
3次調査区
2次調査区
X−173,460
0
10m

第5図　B区遺構平面図

余mの範囲である。地形的には段丘の上に位置する。

現況は軌道と枕木を撤去した状態の線路敷であり、表土は地盤改良によって攪乱を受けていた。このため攪乱部分については機械掘削で除去し、それ以下の包含層を人力によって掘削した。包含層は灰褐色系の微砂質土を基本として構成されており、近世以前の耕土層も認められる。包含層は40～80㎝の厚さで、南西方向へ厚みを減じている。遺構はすべて黄褐色系の粘土・微砂質土層を基盤として検出された。検出標高はT.P.11m前後である。この基盤層は極めて固結した層位であり、段丘堆積層の表層部分とみられる。A区から出土した遺物はほぼ包含層に由来するものである。遺物は瓦器、陶磁器、染付、土師器、瓦などの細片で、量的に極めて少なくまた図化に耐えるものは皆無であった。

2．B区(第3図)

近木川が形成した氾濫原と、その北東端に約2mの比高差を有する低位段丘崖の一部が存在する。現況は、段丘崖上においては軌道と枕木を撤去した状態の線路敷で、氾濫原上は盛土による整形を受けていた。盛土と地盤改良層については機械掘削で除去し、それ以下の包含層を人力によって掘削した。

層序の様相は氾濫原と段丘崖では全く異なっている。氾濫原区域では包含層の存在は認められず、盛土直下のT.P.6.5m前後で近世および近現代耕作土層が検出された。耕作土層直下は近木川によって形成された微砂、砂礫等で構成された沖積層が厚い堆積をみせており、この層位中から土師質釜・瓦器等の破片が若干出土した。段丘崖では、基盤となる自然形成の崖地形から氾濫原に向かって、すなわち南西方向に遺物包含層が長さ15m、最大1.4mの厚さで堆積する。この包含層から中世から近代に至る多量の土器や陶磁器が出土した。

## 第2節　遺構と遺物

1．A区(第4図、図版二)

遺構数は土坑・ピットの合計で30基余と希薄で、北東部では土坑やピットが主体であるが、南西部では土坑の他、耕作に伴う多数の小溝が確認された。土坑は不定形なものが多く、規模は長軸で数10㎝から4m前後に及ぶものがあり、また深さは30～60㎝前後のものが多い。埋土はおよそにぶい黄褐色を呈する微砂であるが、大形の土坑では黒褐色微砂を埋土とするものがある。ピットは大半のものが深さ10㎝以下と浅く、また1990年度調査で検出された掘立柱建物と関連性をもつ柱穴は確認されなかった。

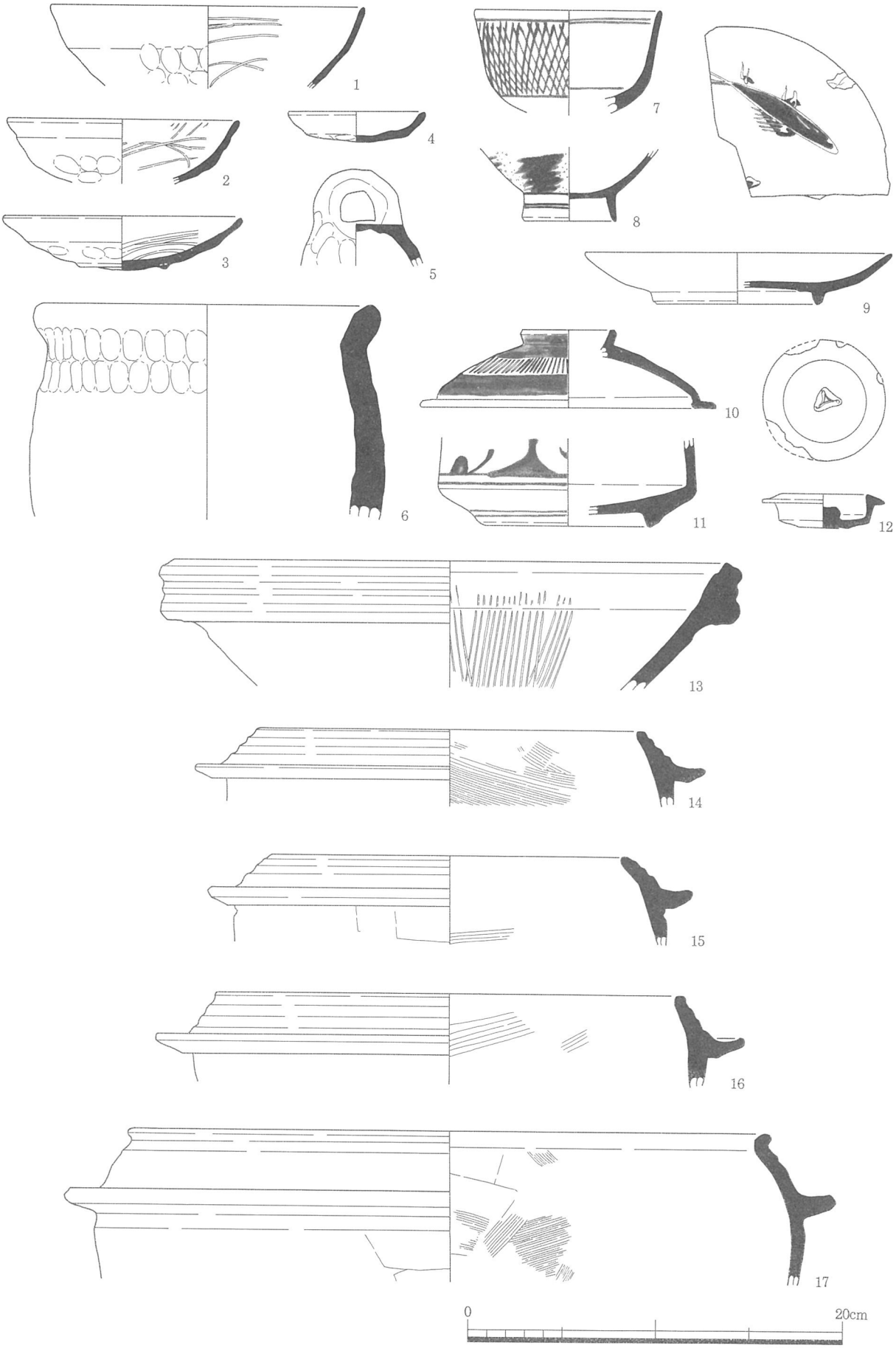
遺構からは全く遺物が出土せず、これらの形成時期は不明である。

2．B区(第5図、図版三～五)

氾濫原上には近世・近代の耕作土層が分布する。近世耕土層はオリーブ褐色微砂で、10～30㎝前後の厚みをもつ。部分的に旧床土層の認められる箇所もあるが、この耕作土層は氾濫原の北東部だけに分布し、南西部にはみられない。沖積層の直上に形成されており、耕作土層以下に遺構面は存在しない。近代耕作土は南海本線建設直前まで機能していた厚さ10㎝前後の耕作土で、氾濫原の全面に分布する。

遺構としては近世の耕作に伴う小溝の他、少数の土坑、溝等を検出している。いずれも遺物はほとんど出土していないが、近世以降の形成と考えられる。なお、耕作土層には若干量の瓦器、土師質土器、染付等が包含されているが、いずれも細片である。

調査区域内にみられる段丘崖は、本来の自然地形の崖が盛土によって南西側に拡張されたものである。出土遺物の大半は、この段丘崖の盛土内から出土している。




第６図　Ｂ区出土遺物実測図

3．遺物(第６図、図版六)

Ｂ区段丘崖を中心に瓦器、釜、染付、磁器、陶器、土師器、瓦などの遺物が出土した。14・15は近世耕作土層から検出された遺物で、その他は段丘崖に盛土された包含層から出土したものである。

１～３は瓦器椀、４は土師器皿、５・６は土師質蛸壺である。７・８は染付碗、９は磁器皿で、内面に遊泳する鯉の図柄をもつ。10は陶器蓋、11は染付容器、12は施釉陶器蓋である。13は陶器摺鉢、14は土師質釜、15～17は瓦質釜である。14・15は耕作土層中から出土した遺物であるが、本来はそのベースを構成する氾濫原の堆積砂礫層に由来するものとみられる。段丘崖の包含層から出土した遺物は、14世紀前後のものと近代のものが混在する。

# 第４章　まとめ

Ａ区は掘立柱建物が検出された１次調査地点の北側に接するが、Ａ区内では建物の痕跡は全く認めることができなかった。従って掘立柱建物は今回の調査区まで及ぶことなく、過去の調査地点の中で完結するものとみられる。全体的に遺構・遺物が希薄であり、遺構の形成時期や性格を特定し難いが、1990年度の調査例から推察すると、12世紀後半段階における集落の縁辺部という見方が可能であろう。またＡ区では調査区南西半部の地山面上において、耕作に伴う多数の小溝が残されていた。この小溝は北東半部にはみられないが、これは調査区の北東側が南西側と比べて地山面が50㎝程度深く、それに伴って包含層が厚いことと関連するものとみられる。包含層からは中近世の土器・陶磁器片等が出土したが、いずれも細片で量も少なくコンテナ１箱に満たない。包含層の一部は耕作土層として利用された痕跡があるが、以上のような状況から細かい時期の特定はできなかった。

Ｂ区はその西側約170ｍの位置に流れる近木川の影響を大きく受けている。この調査区は近木川が形成した河岸段丘と氾濫原を包括しており、段丘上にあって比較的安定したＡ区とは全く異なった様相を呈している。氾濫原を構成する砂礫や微砂を主とした層位には、中世の土師質釜や瓦器碗・瓦質釜などが若干量ではあるが包含されており、調査地における耕地利用は遺物の示す13～14世紀以前には遡らないことを示している。氾濫原の北東部は近世以降に開墾され耕地化している。耕地利用にあたっては特に客土などを施した形跡は認められず、基本的に氾濫原の自然堆積層をベースとする。ベース面上には耕作に伴う小溝の他、若干の土坑や溝などが認められたが、検出状況はまとまったものではない。耕土層からの遺物量はきわめて少なく層厚も30㎝以下と薄いもので、近現代の耕土層との比較からも、この区域が開発されたのは近世の中でもさほど遡るものではなかろう。氾濫原の北東には比高差約２ｍの段丘崖が存在する。この段丘崖は自然形成の地形を基盤として、氾濫原に向かって長さ15ｍ、最大1.4ｍの厚さで、人為的な盛土とみなされる遺物包含層が堆積していた。この層位からは中世から近代に至る遺物が出土している。包含層中にはきわめて新しい陶磁器が多く認められることから、盛土層の形成時期は近代まで下るものとみられる。おそらく段丘上の可耕地面積を拡大する目的で、段丘崖から氾濫原の方向に盛土が行われたのであろう。また包含層中には中世の遺物も多く含まれており、調査区内で遺構を確認できなかったが、Ｂ区付近に当該時期の集落遺構等が存在する可能性は高い。

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふりがな | かじこうざきはたけなかいせき　に |
| 書名 | 加治・神前・畠中遺跡II |
| 副書名 | 貝塚中央線・南海単独立体交差化事業に伴う発掘調査報告書 |
| 巻次 | 2 |
| シリーズ名 | (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第21集 |
| 編著者名 | 西村　歩 |
| 編集機関 | 財団法人　大阪府文化財調査研究センター |
| 所在地 | 〒536－0016　大阪市城東区蒲生2丁目11－3<br>TEL 06－934－6651 |
| 発行年月日 | 1998年3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 加治(かじ)・神前(こうざき)・畠中(はたけなか)遺跡(いせき) | 大阪府(おおさかふ)貝塚市(かいづかし)加神(かがみ) | 27208 | 23 | A　区 | | 2　次　調　査 | | 貝塚中央線・南海単独立体交差化事業に伴う |
| | | | | 34°26′15″ | 135°21′17″ | 1994.12.05～1995.02.28 | 約600m²（B区） | |
| | | | | B　区 | | 3　次　調　査 | | |
| | | | | 34°26′05″ | 135°21′04″ | 1996.11.25～1997.03.31 | 約680m²（A区）<br>約560m²（B区） | |
| | | | | | | 2・3次調査　合計 | 約1840m² | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 加治・神前・畠中遺跡 | 集落・耕地 | 鎌倉～近代 | 土坑、ピット、溝 | 土師器、瓦器、陶磁器 | なし |

# 図　　版

図版一　加治・神前・畠中遺跡遠景

A区（南西から）

B区（北東から）

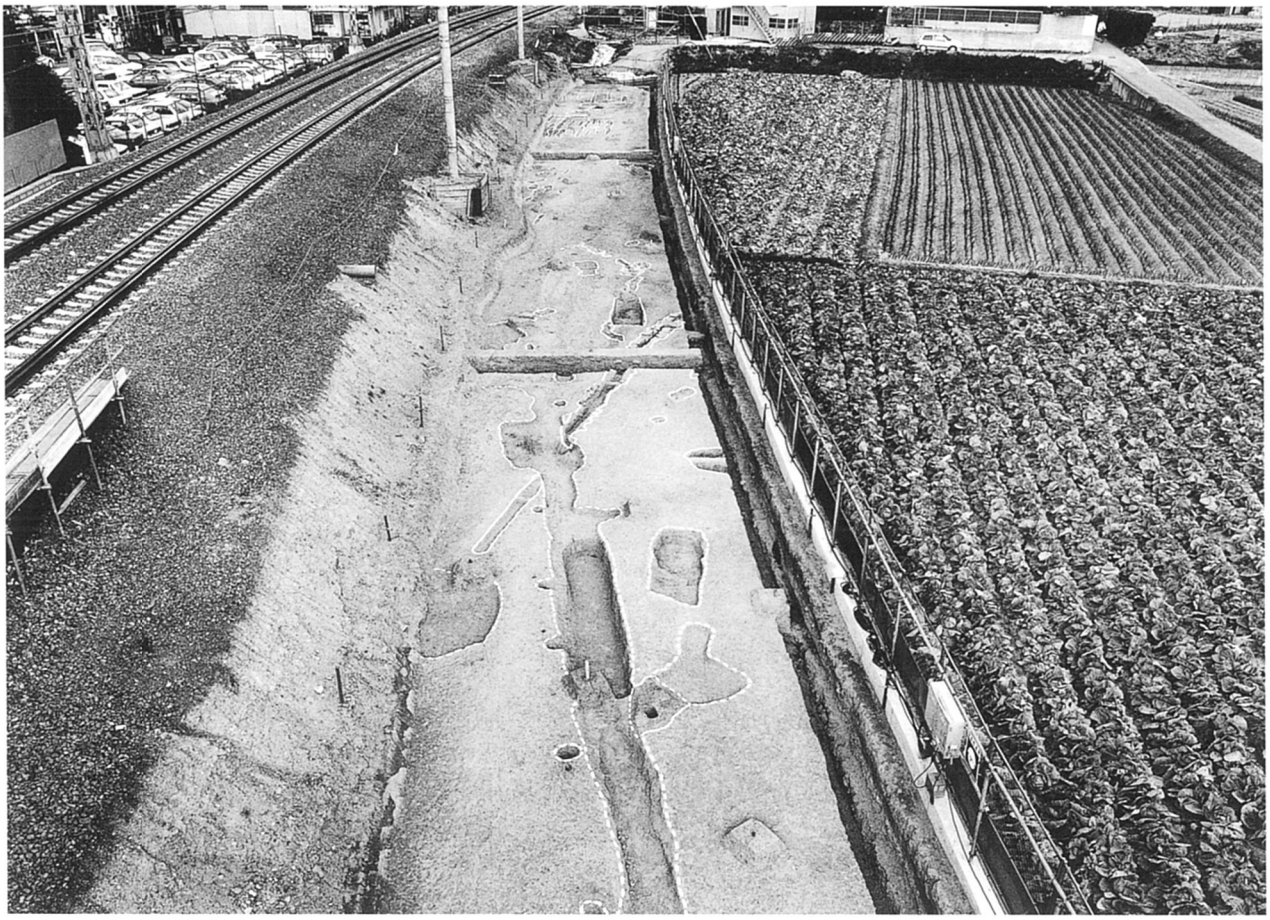
図版二　A区全景

北東から

南西から

図版三　B区全景（2次調査）

北東から



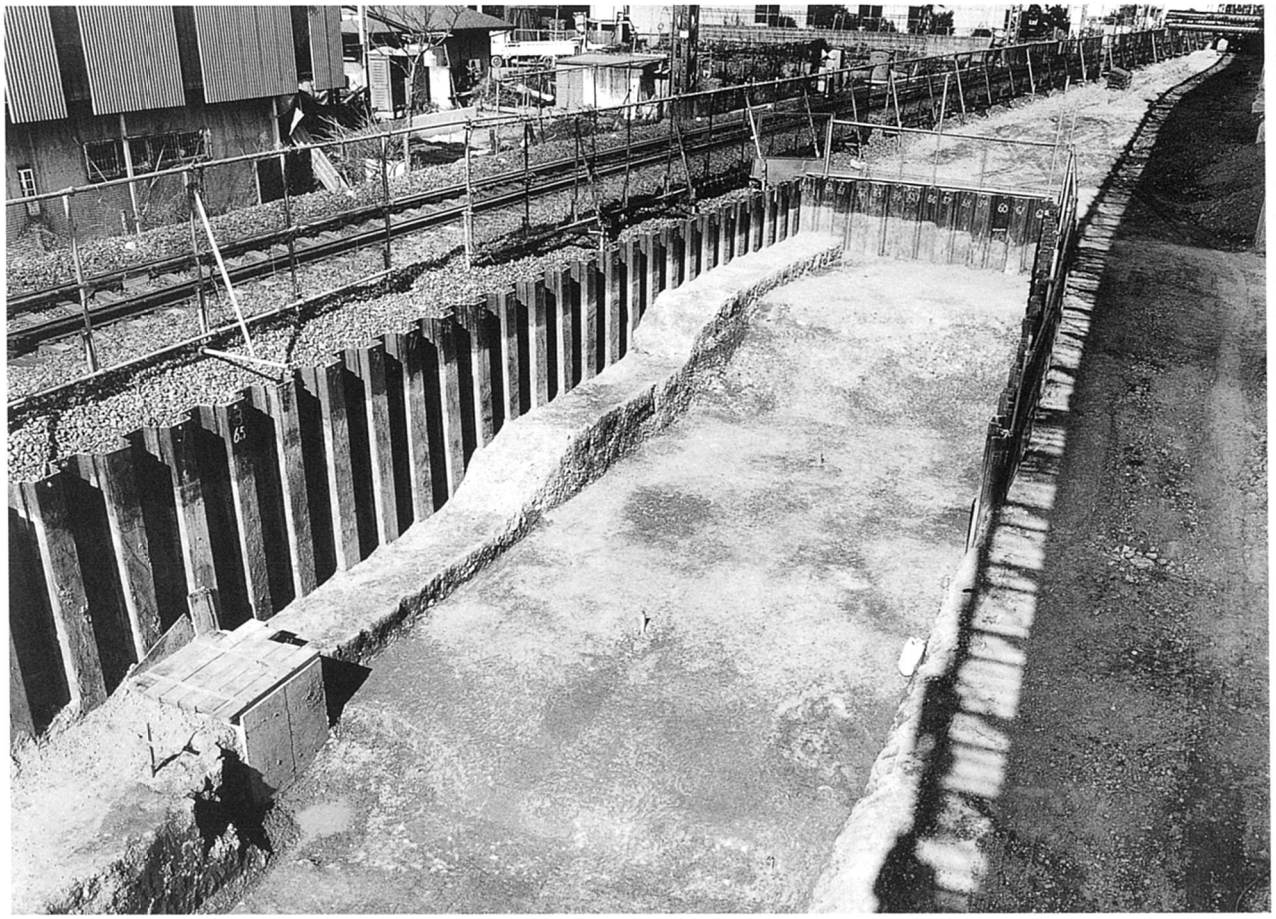
南西から

図版四　B区全景（3次調査）

南西から

東から

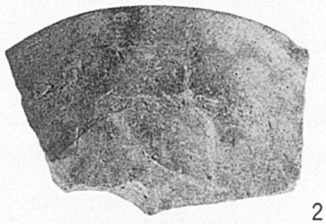
図版五　B区段丘崖周辺（3次調査）



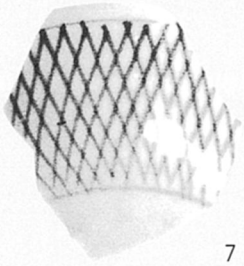
南から

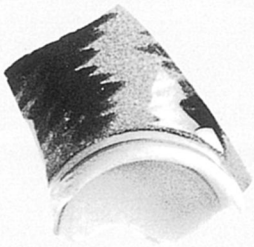
南から

図版六　出土遺物

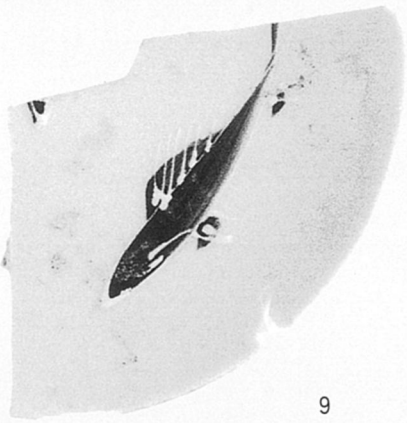

2

3

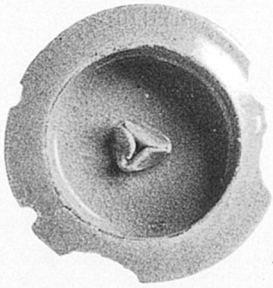

7

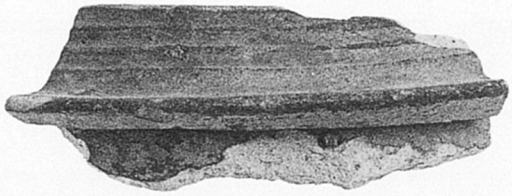

8

1


9

4


12


14

13

15

16

17

㈶　大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第21集

# 加治・神前・畠中遺跡II

## －貝塚中央線・南海単独立体交差化事業に伴う発掘調査報告書－

1997年３月31日

編集・発行　㈶大阪府文化財調査研究センター
〒536－0016 大阪市城東区蒲生２丁目11－３
印刷・製本　株式会社　中島弘文堂印刷所